

ドイツ第三帝国における政軍関係（2）

—国防軍内抵抗派の活動を中心に—

吉 本 隆 昭

Takaaki YOSHIMOTO. Civil-Military Relations in the German Third Reich (2) -Focusing Resistance Group in the Wehrmacht-. *Studies in International Relations* Vol.38, No.2. February 2018. pp.1-10.

The German Third Reich is well thought to be a “solid” sovereign. However, there were many resistance groups in the German Third Reich. Among them, the resistance group in the Wehrmacht was the most powerful and practicable to destroy Hitler and Nazi-regime. They convicted coup-d’état, assassinating Hitler, on 20th July 1944, which ended up in failure. As a result, Germany lost its last chance for early peace conciliation, and had to fight disastrous war with allied countries, until Berlin fell and Hitler killed himself in May, 1945. This thesis analyzes the resistance movement in the Wehrmacht and clarifies the cause of their failure from the viewpoint of civil-military relations in the German Third Reich.

はじめに

一枚岩であったと考えられやすいドイツ第三帝国において、実際は独裁者アドルフ・ヒトラーとナチス政権に反対するいくつもの抵抗グループがあり、様々な抵抗運動が行われた。その中にあってドイツ国防軍（Wehrmacht）内で形成された抵抗派（以下、軍内抵抗グループと称する）は最も強力にヒトラーとナチス政権を打倒する可能性が高かったが、1944年7月20日に決行されたヒトラー暗殺とナチス政権打倒のクーデターは失敗して抵抗グループは完全に壊滅した。それによって戦争の早期終結の機会を失ったドイツは、翌1945年5月にヒトラーが自殺し首都ベルリンが陥落して、全土が連合軍に占領するまで戦闘を続け、国土の破壊と多くの犠牲者を出す結果になった。

本論文は、ドイツ第三帝国での反ナチ抵抗運動を概観し、その中でもナチス政権打倒の成功の可能性が最も高かった軍内抵抗グループの実態をドイツ第三帝国の政軍関係の中から考察し、さらにヒトラー及びナチス政権打倒計画失敗の原因を明らかにするものである。

我が国でもドイツ第三帝国（ドイツ現代史）研究の一環として反ナチ抵抗グループの研究は行わ

れているが、ドイツ第三帝国における政軍関係の観点からの研究は皆無であり、本論文が今後この分野での研究の進展に一石を投じることになれば望外の喜びである。

なお本論文作成に主として使用した一次史料は、平成29年8－9月に日本大学海外派遣研究者（短期B）によって、ベルリンで収集したドイツ抵抗記念館所蔵文書に依る。同記念館にはドイツ政府の長年の努力によって多数の反ナチ抵抗派関連文書が収集、所蔵されている。

1 ドイツ第三帝国の反ナチ抵抗運動

ドイツ第三帝国には、様々な反ナチ抵抗グループや個人の抵抗者が存在し、今までの研究で明らかになっただけでも、42回のヒトラー暗殺計画があったが、ヒトラーは強運でその全てから逃れて生き延びた。軍内抵抗グループ以外の主要な抵抗グループ、勢力は次の様である。

(1) 左翼グループ

1933年のナチス政権成立以前からナチスの政敵であった左翼勢力のドイツ共産党（KPD）や社会民主党（SPD）は、第三帝国になっても抵抗を続けたが、ゲシュタポ（秘密国家警察）の厳しい追

及によって、社会民主党はロンドンへ、共産党はモスクワに亡命して、国外から反ナチ運動を続けることになった。

一方、ドイツ国内に残った社民党支持の大部分の人々は、「内的抵抗」と呼ばれる各人の心の中だけで抵抗する消極的な抵抗で、ナチスの支配する第三帝国で日常生活を送った。

ドイツ国内の共産党系の抵抗グループは、大部分がゲシュタポの取締りで壊滅したが、モスクワ（赤軍情報部）の指令下で少数が活動を続けた。その一つが「ローテ・カペレ（赤い楽団）」の秘匿名で呼ばれたドイツ空軍将校のハロ・シュルツェーボイゼンと経済省職員アルフレート・フォン・ハルナックを指導者として、100名以上の軍人、官吏、学者、学生、ジャーナリスト等の多彩な人々で構成された抵抗組織であったが、1942年8月にゲシュタポに摘発されて組織は壊滅した。この組織は、戦後西ドイツでは、抵抗グループというよりもソ連指令下の軍事情報収集のための共産主義者のスパイ組織と考えられてきたが、冷戦終結後の旧ソ連等、東側の史料が閲覧できるようになって、共産主義者によるスパイ組織ではなく広範なドイツ人による反ヒトラー、反ナチ抵抗グループの一つと考えられるようになった⁽¹⁾。

(2) キリスト教会

キリスト教のカトリック派は、ワイマール時代からカトリック中央党という政党を組織してナチ党と戦ったが、ナチス政権成立後の1933年7月、ナチス政権がローマ教皇庁とコンコルダート（政教条約）を締結したことにより、カトリック教会はナチスを承認し、教会外の問題は国家に委ねることになった。その結果、カトリック中央党は解散させられ、その他のカトリック諸団体もナチスに吸収された。これによってドイツ・カトリック教会の政治力は失われ、ミュンヘン大司教ファウルハーバーが説教でナチスを批判したり、ベルンハルト・リヒテンベルク司祭、フランツ・ライニシュ神父、マックス・ヨゼフ・メッツガー神父等が個人としてナチスを批判し抵抗した以外は、カトリック教会の反ナチ抵抗運動はほとんどなかった⁽²⁾。

一方プロテスタント教会では、福音派のルート

ヴィッヒ・ミューラー牧師を指導者にドイツ・キリスト者運動を組織して、親ナチの統一プロテスタント教会の設立を図ったが、これに対してマルティン・ニーメラー牧師らが、1934年に告白派を組織して、バルメンで会議を開催して、ドイツ・キリスト者主導の帝国教会に反対した。この事態に、ナチスが介入して、1937年7月ニーメラー牧師は逮捕投獄された。その後は、ディートリッヒ・ボンヘッファー牧師を中心にゲルデラー、クライザウ・グループとも連携しながら抵抗運動を続けた⁽³⁾。

(3) 青少年グループ

若者による抵抗グループも存在した。アダルベルト・プローブストを指導者とするカトリック青年組織は、ナチスの青年組織であるヒトラー・ユーゲント（HJ）と街頭で乱闘事件を起こす等、闘争を続けてきたが、カトリック教会指導部がコンコルダート（政教条約）締結により、ナチスと妥協したことに激しく抗議した。その結果、プローブストは1934年6月のレーム事件（ナチ突撃隊指導部の粛清）の混乱に紛れてナチスに殺害された。それに対してカトリック青年組織は、プローブストを殉教者として抵抗を続けたが、1937年に全てのカトリック系団体は禁止され、指導者達はゲシュタポに逮捕されたが、それ以降も地下活動で抵抗を続けた⁽⁴⁾。

一方、大学生による抵抗運動も起こった。ハンス、ゾフィーのシオル兄妹とヴィリー・グラーフ等、20名の学生とクルト・フーバー教授によるミュンヘン大学での「白バラ」抵抗運動（Weiße Rose）である。1942年中頃から4種類の反ナチのビラ配布が行われ、1943年に入るとさらに数千枚の反ナチ・反戦ビラの配布、郵送とミュンヘンの街頭にペンキでスローガンを書いて、ナチス体制の崩壊と戦争の終結を主張したが、1943年2月18日に全員がゲシュタポに逮捕され、シオル兄妹ら5名の学生とフーバー教授が死刑判決を受けて断首された。残りの10名の学生も有期刑に処されて、白バラ抵抗グループは壊滅した。しかしながら、白バラ抵抗運動のビラを読んだ人数は数千人に及び、その中にはクライザウ・グループの指導者モルトケ伯爵も含まれていた。ハンブルク大学でも

白バラに啓発されて抵抗運動が起こり、30名がゲシュタポに逮捕されたが、その半数が連合軍に救出されている⁽⁵⁾。

さらに「スウィングス (Swings)」と呼ばれるスウィング・ジャズを愛好する裕福な家庭の子女のグループによる抵抗も存在した。その中で最大のグループは100名程度でハンブルクに存在した。彼らは、ヒトラーユーゲントに対抗してイギリス風の派手な服装でジャズパーティーを開いていたが、1940年にジャズパーティーが当局に禁止されたのを契機に、ナチス当局に反抗して、英語を話しジャズを聴き、自堕落な生活を送ることで抵抗したが、やがてヒトラーユーゲントの訴えによって大半がゲシュタポに逮捕されて強制収容所か刑務所に送られた。彼らは、初めはジャズ好きの富裕市民の子女の集まりにすぎなかったが、ヒトラーユーゲントによるナチススタイルの押しつけと当局によるジャズ禁止によって一気に反体制、反ナチの政治化したものであった⁽⁶⁾。

一方、ライン・ルール地方では、スウィングスとは対照的な「エーデルヴァイス (Edelweiß) 海賊団」と呼ばれた工場労働者の子女で構成されたグループが存在した。彼らは、ヒトラーユーゲントとの縄張り争いから、徒党を組んで暴力行為に及び、さらに配給食料を強奪して警察に逮捕された。ただ彼らは、反ナチ抵抗グループというより非行少年の犯罪集団と見なされたが、結局ゲシュタポによって逮捕され、1944年11月に、彼らの内13名が公開絞首刑に処された。今日ドイツでも彼らを反ナチ抵抗グループの一つと判断すべきか、単なる非行少年の犯罪集団と判断すべきか、評価は定まっていない⁽⁷⁾。

(4) 保守派グループ

現状打破の大衆政治運動であったヒトラーとナチスに対して、ドイツの伝統的な保守支配層は嫌悪し、いくつもの抵抗グループが形成された。その中で最大グループが、ライプチヒ市長を務めたカール・ゲルデラーを指導者に、資本家、官僚、大学教授、外交官等の上流階級で構成されたゲルデラー・グループである。このグループは、後に述べる軍内抵抗グループとも連携しており、反ナチ・クーデター成功後は、新政府の首相就任が予

定されていた⁽⁸⁾。

次は、ドイツ統一戦争勝利の立役者であったモルトケ元帥の子孫であるヘルムート・フォン・モルトケ伯爵を中心とするクライザウ・グループ (Kreisauer Kreis) である。このグループには、ナポレオン戦争で活躍したヴァルテンブルク元帥の子孫ペーター・ヨルク・フォン・ヴァルテンブルク伯爵も加わり、当初は若い貴族名家の反ナチ交友グループにすぎなかったが、やがて社会主義者、聖職者等多様な人物が加わり、本格的な反ナチ抵抗グループを形成した。しかし、1944年1月にモルトケ伯爵がゲシュタポに逮捕されてからは、残ったメンバーは、軍内抵抗グループに接近し協力することになる⁽⁹⁾。

(5) その他の抵抗運動

抵抗運動には、いずれのグループにも属さず、どこの指令も受けない一匹狼でヒトラーの暗殺を図った者もいた。その代表例が、失業中の家具職人ゲオルク・エルザーが、1939年11月8日夜にミュンヘンのビアホール・ビュルガーブロイケラーで時限爆弾を爆発させた事件である。ヒトラーは、毎年ミュンヘン一揆の記念日である11月8日に、ビュルガーブロイケラーで演説しているが、この時は、霧のために帰路を飛行機から列車に変更したので、いつもより13分前にその場を離れて無事であった。エルザーはスイスへ逃亡を図ったが、国境で捕らえられて、ドイツ敗戦直前に処刑された。エルザーは全くの単独犯で、犯行動機は共産主義のシンパで戦争の阻止と言われているが謎が多い。しかし、近年研究が進み、エルザーも反ヒトラー抵抗者として再評価されている。ただ、この事件の結果、ヒトラーの身辺警護は強化され、行動も秘匿されて不規則になり、ドイツ国内では爆薬等の危険物の管理が厳しくなり、それ以降のヒトラーの暗殺計画は、より難しくなった⁽¹⁰⁾。

2 国防軍内反ナチ抵抗派 (軍内抵抗グループ)

ドイツ国防軍 (Reichswehr、後に Wehrmacht と改称) は、ヒトラー及びナチス政権成立直後には、その軍備増強政策に賛同して支持していたが、1938

年1月の国防大臣ヴェルナー・フォン・ブロンベルク元帥と陸軍司令官ヴェルナー・フォン・フリッチュ上級大将等の軍首脳の失脚（ブロンベルク・フリッチュ危機）に反発して反ヒトラー、反ナチの機運が生まれ、オーストリア併合、さらにズデーテン地方併合に際してのチェコスロバキアとの開戦危機によって反ヒトラー運動が開始された。その中心になったのは、ルートヴィヒ・ベック陸軍参謀総長であった。ベック上級大将は、8月チェコスロバキアとの危機が高まる中、ナチ政権に反対して辞職し、以後軍内抵抗グループの中心人物になる。同年9月のズデーテン地方併合に際しては、後任のフランツ・ハルダー参謀総長とエルヴィン・フォン・ヴィッツレーベン第3軍管区司令官らがヒトラー排除のクーデターを計画（9月陰謀）するが、ミュンヘン会談による危機回避で不発に終わった。国防軍最高司令部（OKW）情報部（Abwehr）でも、反ヒトラー、反ナチス抵抗グループが存在した。国防軍最高司令部情報部は、ヴィルヘルム・カナリス海軍大将の指揮下にハンス・オスター中佐（後に少将）を中心に抵抗組織が形成され、情報活動を隠れ蓑に国防軍内での抵抗運動の中心になったが、1943年4月にSS（ナチ親衛隊）の知るところとなり、オスターが免官になって情報部での抵抗運動は消滅した⁽¹¹⁾。

第二次大戦開戦後は、ドイツの対ポーランド戦、対フランス戦（西方作戦）での圧倒的な勝利によって軍内の反ヒトラー機運は低調になるが、1941年の対ソ戦の開始により、ナチズム実現のための政治イデオロギー戦争の正当性への疑義、過酷な占領政策、さらにSS特別行動隊によるユダヤ人住民の大量虐殺への嫌悪、反発等から再び軍内に反ヒトラー、反ナチの機運が生じた。特に1943年のスターリングラード戦敗北後は、対ソ戦での勝利の可能性が無くなり、ドイツ敗戦によるドイツ及びヨーロッパ全体の共産化の脅威から、国防軍内にヒトラーを排除して戦争を早期に終結させようとする抵抗グループが力を増していくことになる。

国防軍内には、国防軍最高司令部情報部のオスター・グループとは別に三つの抵抗グループが存在した。第一は、ベルリンの陸軍総司令部軍務局長フリードリヒ・オルブリヒト大将を中心とす

るグループ。第二は、フランス占領軍の軍政長官カール・ハインリッヒ・フォン・シュチュルプナーゲル大将を中心とするグループ。第三は、東部作戦軍中央軍集団作戦主任参謀ヘニク・フォン・トレスコウ大佐（後に少将で参謀長）を中心とするグループである。ほとんどがプロイセン以来の貴族（ユンカー）出身の正統派の軍人（将校）達であった⁽¹²⁾。

その中で最初に行動を開始したのは、トレスコウ・グループであった。1943年3月、ヒトラーの東部戦線の前線視察の際に射殺を図るがクルーゲ中央軍集団司令官の反対で未遂に終わり、さらにヒトラー搭乗機にコニャックに入れた爆弾を仕掛けるが、不発で失敗した。その一週間後にベルリンの武器展示会でヒトラーの爆殺を図るが、ヒトラーが予定を変更して途中で帰ったために、これも失敗した⁽¹³⁾。

3 7月20日事件

1943年3月に、北アフリカ戦線チュニジアで英軍戦闘機の機銃掃射を受けて、右手、左手指2本、左眼を失う重傷を負ったが、9月には不屈の意志で軍務に復帰して国内補充軍参謀長に任ぜられた伯爵クラウス・シェンク・フォン・シュタウフェンベルク参謀大佐が、ベルリンの国内補充軍司令部に着任して、オルブリヒト大将のグループに加わったことにより、反ヒトラー、反ナチ・クーデター計画は一気に実行へと突き進むことになる。その中心的な存在は、堅い意志と実行力を備えたシュタウフェンベルク大佐であった。

シュタウフェンベルク大佐は、シュヴァーベンの名門伯爵家の3男で、ギムナジウム修了後、1926年に国防軍（陸軍）に入隊し、1930年に少尉に任官している。1938年陸軍大学校を卒業して参謀本部に勤務した。ナチス政権成立時にはヒトラーとナチスを支持していたが、対ソ戦開始後、母方の叔父フォン・ユキェスクル・ギレンバント退役大佐やトレスコウ大佐らから、東部戦線でのソ連軍捕虜の虐待、コミサール命令による政治将校の処刑、ユダヤ人住民の大量殺害等を知るに及んで、ヒトラーとナチス政権の犯罪性と彼らが祖国ドイ

ツを敗戦に導き破滅させると確信するに至り、ヒトラーとナチス勢力を実力をもって排除すべきとの結論に到達していた⁽¹⁴⁾。

シュタウフェンベルク大佐が国内補充軍(Ersatzheer)参謀長に任ぜられたことは、ヒトラーとナチス政権打倒にとって最大の僥倖であった。何故ならば国内補充軍は、前線で戦っているドイツ陸軍野戦軍に対して部隊、兵員を補充する任務を有しているのだから、参謀長としてその報告でヒトラーに直接会う機会があり、また国内補充軍は、ドイツ国内の治安維持の任務も有しており、国家緊急事態が発生した場合には、指揮下の警備部隊を出動させて秩序を回復することになっていたからである。その秩序回復、治安維持のための作戦計画が「ヴァルキューレ」計画であった。シュタウフェンベルク大佐らは、ヒトラー殺害後「ヴァルキューレ」作戦を発動してクーデターを起こし、ナチス、特にSS、保安警察を排除して、ドイツ全土、全軍を掌握して、新国家を樹立する計画であった。そこでシュタウフェンベルク大佐らは、クーデター成功後の新国家樹立と運営のために、軍内のみならずゲルデラー・グループ、クライザウ・グループ等とも連携していた。新ドイツ国家の大統領には元参謀総長のルートヴィッヒ・ベック上級大将、首相にはゲルデラーが予定されていた⁽¹⁵⁾。

1944年7月20日遂に計画実行の日を迎えた。午前10時過ぎ、ドイツ陸軍国内補充軍参謀長シュタウフェンベルク大佐と副官のヴェルナー・フォン・ヘフテン中尉は、東プロイセン・ラストンブルク近郊の総統大本営ヴォルフスシャンツェ(狼の巣)に空路ベルリンから到着した。シュタウフェンベルク大佐は、午後1時からの会議で2個師団の新編についてヒトラーに報告することになっていた。しかし、シュタウフェンベルク大佐の真の目的は、鞆に潜ませて持参した爆薬によってヒトラーを暗殺することであった。

シュタウフェンベルク大佐は、12時30分予定より早く始まった会議に参加し、時限信管を起動させた爆薬1個を入れた鞆をヒトラー近くの机の下に置いた。ベルリンに重要な電話があると中座した12時42分、作戦室は大音響と共に爆発した。それを目撃したシュタウフェンベルク大佐は、ヒト

ラーは死亡したと確信して、ヘフテン中尉と共に飛行場に到着して、空路ベルリンに向かった。

爆弾が爆発した作戦室には、ヒトラーを含めて24名がいたが、その内ヒトラーの右にいた4名が死亡、3名が重傷を負った。ヒトラーは、ブラント大佐が爆発直前にシュタウフェンベルク大佐が置いた鞆が邪魔になったので机の奥に移動させたために机の脚に遮られて奇跡的に軽傷ですんだ。しかし、反ヒトラー派のフェルギーベル通信総監が総統大本営の外部への通信を遮断したために、ヒトラーの生死は不明のままであった⁽¹⁶⁾。

ヒトラー暗殺後、直ちに「ヴァルキューレ」作戦が発動される計画だった。パリではシュチュルプナーゲル大将が、計画に従って、在パリのゲシュタポとSSを逮捕して全権を掌握したが、ベルリンではヒトラーの死亡が確認できなかったために、国内補充軍司令官フリードリッヒ・フロム上級大将はヴァルキューレ作戦の発動に同意せず、そのため反ヒトラー派はフロムを拘束して、シュタウフェンベルク大佐のベルリン帰着を待つようやうく作戦を発動した。国内補充軍司令部指揮下の各軍管区は次々にクーデターに同調したが、総統大本営との通信が回復してヒトラーの生存が明らかになり、ヒトラー自身がラジオ放送するに及んで一気に形勢は逆転し、オットー・エルンスト・レーマー少佐の指揮するベルリン警備大隊が、ヒトラー側に寝返って国内補充軍司令部を制圧してフロム上級大将を解放した。フロム上級大将は、自分の関与の疑いを払拭するために、オルブリヒト大将、シュタウフェンベルク大佐等のクーデター計画加担者5名を司令部内で直ちに銃殺刑に処した。こうして反ヒトラー、反ナチ・クーデター計画は完全に潰えた⁽¹⁷⁾。

4 抵抗運動の終焉

7月20日事件で奇跡的に助かったヒトラーの怒りはすさまじく、翌21日午前1時ヒトラー本人のラジオ放送があり、自分の生存と暗殺未遂事件の残虐さを述べ、事件加担者の容赦ない一掃を命じた。直ちに国家保安本部(RSHA)内のゲシュタポ本部に400名の特別捜査チームが編成され、事

件関係者20名を当日中に逮捕し、さらにその家族、親族も逮捕した。それだけではなく事件に直接関与しなかったが、以前から反ヒトラー派と目されていた人々も次々に逮捕された。一方事件に荷担したが当日国内補充軍司令部にいなかった軍人達は、ヒトラーの生存と計画の失敗を知って次々に自決した。ヴァグナー陸軍参謀次長、中央軍集団参謀長トレスコウ少将、パリの軍政長官シュチュルプナーゲル大将、さらに関与が疑われた西方総軍司令官ハンス・クルーグ元帥、B軍集団司令官エルヴィン・ロンメル元帥等も自決した。

ゲシュタポの逮捕者は、事件関係者約600～700名、その家族、親族、非関係者の反ナチの人々で、2ヶ月の捜査で総計7千人に達したと言われている⁽¹⁸⁾。

それらの人々は、政治犯を裁く最高裁判所として1934年にベルリンに設置されたローラント・フライスラーを裁判長とする民族裁判所で裁かれた。ただ事件関係の軍人は、まず軍法会議で軍籍剥奪、除隊となり、民間人として民族裁判所で裁かれた。公判は8月7日に開廷し、フライスラー裁判長は一方的に被告を侮辱罵倒して、国選弁護人のみで一審で死刑判決を下し、即日絞首刑が執行された。裁判では、途中連合軍の爆撃で裁判所が被弾し、フライスラー裁判長が死亡して裁判資料が消失する等のハプニングが起きたが、裁判は翌1945年4月19日まで続けられた。資料が不完全で正確には分からないが、民族裁判所の判決で数百人が処刑されたと言われている。さらに7月20日事件とは直接関係のない反ヒトラー、反ナチ運動の指導者も処刑され、この中には1月に死刑判決、処刑されたモルトケ伯と彼のクライザウ・グループの人々も含まれていた。その他の多くの人々が強制収容所に送られた。こうしてドイツにおける反ヒトラー、反ナチの運動は完全に消滅し、ドイツ国防軍も完全にナチスの支配するところとなった⁽¹⁹⁾。

5 ヴァルキューレ作戦失敗の原因

軍内抵抗グループによるヴァルキューレ作戦、すなわちヒトラー殺害、クーデター実行、新体制の樹立がいずれも失敗したのはなぜか。

まずヒトラーの殺害に失敗したのはなぜか。これには、まず二つの偶然が作用した。

①ヒトラーが出席する作戦会議の場所が、当日は蒸し暑かったために、予定されていた密閉された頑丈なコンクリートバンカー（地上設置型防空壕）から通常の建物に変更されたために、爆薬の爆発効果が減殺された。

②爆発直前に、ヒトラーの右側にいたブラント大佐が、シュタウフェンベルク大佐が置いた爆薬をセットした鞆が邪魔になったので、机の奥に移動させたために、ヒトラーは大きな机の頑丈な脚に護られる結果になり、軽傷ですんだ。ちなみにブラント大佐は片足を吹き飛ばされて2日後に死亡している。

次に、これは最初から分かっていたことであるが、シュタウフェンベルク大佐は、北アフリカ戦線で負傷して右手がなく、左手も指2本を失っていたために、残された左手の3本の指だけで、限られた時間、場所での起爆作業をしなければならず、当初2個爆発させる予定であった爆薬は、1個にしか信管をセットできなかったために、爆発威力が不足した。

次に、クーデターはなぜ成功しなかったのか。暗殺計画の中心人物で全体の実質指導者であったシュタウフェンベルク大佐が総統大本営でのヒトラー暗殺の実行者であったために、緊要な時期に計画の発動と指揮ができず、ベルリンの国内補充軍司令部からのヴァルキューレ作戦発動の発令が大幅に遅れた。爆薬爆発後直ちにヴァルキューレ作戦が発動されていれば、例えヒトラーが生きていても、当初総統大本営と外部との通信は遮断されていたために、その間にドイツ全土、及びドイツ占領地でクーデターが成功する可能性はあった。ただヒトラーとナチス政権を打倒する強固な意志と能力と実行力を併せ持つて、ヒトラーに接近できる人物はシュタウフェンベルク大佐以外には、いなかったのかもしれない。

さらにクーデター実行時に、最も重要なドイツの首都ベルリンを押さえる役割を持つ大ドイツ連隊のベルリン警備大隊の大隊長を反ナチ抵抗グループに引き入れておくか、反ナチ側の人物を就けておく必要があった。実際にベルリン警備大隊長オッ

トール・エルンスト・レーマー少佐は、クーデター発動直後、ベルリンにいたヨゼフ・ゲッベルス宣伝相を逮捕に行ったが、ゲッベルスに説得され、ヒトラーが生存していると知って、ナチス側に寝返り、クーデター計画実行の中心であるシュタウフェンベルク大佐のいる国内補充軍司令部を攻撃して制圧し、クーデターに止めを刺している。

クーデターは失敗したのであるから、新国家樹立があり得ないのは当然である。

おわりに

最後に、軍内抵抗グループのドイツ国内の位置と戦後の評価である。

彼らの大部分は、先祖代々の領地を持つ裕福で名門の貴族(ユンカー)で代々高級軍人の家系の陸軍大学卒の国防軍エリート将校達であった。一般庶民に支持されて現状変革を目指した大衆政治運動のヒトラーとナチスとは、全く違う社会階層である。それでも彼らは、第一次大戦敗戦の結果成立したワイマール共和制とヴェルサイユ条約には反対していたので、それを打破するヒトラー・ナチス政権の成立を支持していた。しかしながら、ヒトラー政権による周辺国への侵略、ユダヤ人迫害、独ソ戦での収奪、絶滅戦争を知るに至って、ヒトラーの殺害とナチス政権の打倒を決意するに至ったのである。そうは言っても、彼らは、ドイツの一般国民、庶民とはかけ離れた雲の上の別世界の人々であり、戦争中に国民が選んだ国家指導者を殺害してクーデターを起こすことを大多数の一般国民が支持するかは疑問である。そうであるならば、クーデター成功で成立した新生ドイツは、国民を軍隊の実力で抑える軍事政権にならざるを得ない。しかし、その軍隊においても、一般庶民出身がほとんどである下士官、兵に支持されるとは思えない。反クーデターが起こるかもしれないし、反抗、反乱が頻発して軍は崩壊して連合国に敗北していたかもしれない。

シュタウフェンベルク大佐を中心とする軍内の反ヒトラー、反ナチス抵抗運動は、戦後当初は戦争中の「背後からの卑劣な陰謀」として裏切り者、反逆者と言われ、占領軍にも否定された。しかし、

1951年にベルリン警備大隊長だったレーマーが、7月20日事件参加者を反逆者、売国奴と述べて名誉毀損で訴えられた裁判で、レーマーは名誉棄損で有罪で3ヶ月の禁固刑に、7月20日事件を起こした将校達は祖国愛と無私の自己犠牲によって国民を救おうとしたものであり、国家反逆ではないという判決が下り、彼らの名誉回復と不法国家に対する抵抗の正当性が認められた⁽²⁰⁾。これを切っ掛けに、7月20日事件で処刑された将校達の遺族は、旧国内補充軍司令部の中庭に犠牲者の慰霊碑を建立し、通りの名称もベントラー通りからシュタウフェンベルク通りに改称され、建物内にささやかな7月20日事件の常設展示が行われるようになった。さらに1989年には、シュタウフェンベルク大佐が勤務し抵抗運動の中心となった旧国内補充軍司令部は、7月20日事件参加者を中心に、ナチズムに対するドイツでの抵抗のすべてを包括するドイツ抵抗記念館(Gedenkstätte Deutscher Widerstand)となり、現在も新国防省の隣にすべての抵抗運動の展示、史料の収集、整理の中心組織となって活動を続けている⁽²¹⁾。

一方、1955年の再軍備によって誕生したドイツ連邦軍では、当初はシュタウフェンベルク大佐の行動は国家反逆であるとの見方が強かったが、1953年アドルフ・ホイジンガードイツ連邦軍総監が、彼らを軍人の模範と賞賛し、彼らは勇気ある人々、ドイツの良心と評価したことによって、現在の連邦軍に連なるドイツ軍人の理想像と見做されている。さらに1968年のドイツ連邦共和国基本法(憲法)の改正で、第20条に「抵抗権(Widerstandsrecht)」が追加され、すべてのドイツ国民は、民主的で社会的なドイツ連邦国家を守るために抵抗権が認められることになった⁽²²⁾。それ故に、国内で最強の武力を有するドイツ連邦軍では、軍人に対する内面指導(Innere Führung: 精神教育)での最も重要なテーマの一つは軍の「抵抗権」、すなわち国家の命令に「服従(Gehorsam)」するのか、あるいは不法国家の命令には軍人の「良心(Gewissen)」に基づいて抵抗するのか、それを如何なる場合に如何なる条件で行使するかを議論を通じて、各人に理解させている。

註

- (1) Gedenkstätte Deutscher Widerstand: Ständige Ausstellung Widerstand gegen den Nationalsozialismus, Berlin 2015, Bereich 17: Rote Kapelle. (ドイツ抵抗記念館史料, 以下 GDW: SAWN と略する。No.17 赤い楽団) 山下公子『ヒトラー暗殺計画と抵抗運動』(講談社, 1997年), 130 - 151 頁。
對馬達雄『ヒトラーに抵抗した人々－反ナチ市民の勇気とは何か－』(中央公論新社, 2015年), 250 頁。
- (2) GDW: SAWN, Bereich 5-3R, 24-3, 4: Widerstehen aus Katholishem Glauben. (カトリック)
中井晶夫『ヒトラー時代の抵抗運動－ナチズムとドイツ人－』(毎日新聞社, 1982年), 88 - 113 頁。
- (3) GDW: SAWN, Bereich 5-2R, 24-1, 2: Widerstehen aus evangelischem Glauben. (プロテスタント)
中井, 前掲書, 113 - 123 頁。
- (4) GDW: SAWN, Bereich 18-2: Widerstand junger Christen. (キリスト教青年組織)
Ger van Roon: Widerstand im Dritten Reich, München 1994, S.44, 113-114.
- (5) GDW: SAWN, Bereich 16: Weisse Rose. (白バラ)
M.C. シュナイダー/W. ズュース『白バラを生きる』浅見昇吾訳 (未知谷, 1995年)
インゲ ショル『白バラは散らず』内垣啓一訳 (未来社, 1977年)
関楠生『「白バラ」－反ナチ抵抗運動の学生達』(清水書院, 1995年) を参照せよ。
- (6) 山下, 前掲書, 201 - 203 頁。
- (7) 竹中暉夫『エーデルヴァイス海賊団－ナチズム下の反抗少年グループ』(勁草書房 1998年) を参照せよ。
- (8) GDW: SAWN, Bereich 13: Regierungspläne. (政権構想)
- (9) GDW: SAWN, Bereich 15: Der Kreisauer Kreis. (クライザウ・グループ)
- (10) GDW: SAWN, Bereich 11.2R: Georg Elser und das Attentat v.8. November 1938. (エルザー事件)
對馬, 前掲書, 252 - 255 頁。
- (11) GDW: SAWN, Bereich 10.1R: Umsturzplanungen 1938. (1938年クーデター計画)
對馬, 前掲書, 94 - 98 頁。
山下, 前掲書, 154 頁。
- (12) GDW: SAWN, Bereich 11.1R: Umsturzpläne und Attentatsversuche. (クーデター・暗殺未遂)
Gedenkstätte Deutscher Widerstand: Themenkatalog 8, Wege zum 20. Juli 1944, Berlin 2014.
- (13) Ebenda.
Uta von Aretin: Freiheit und Verantwortung. Henning von Tresckow im Widerstand, Baden 2011, S.20-30.
- (14) Gedenkstätte Deutscher Widerstand: Claus Schenk Graf von Stauffenberg und der Umsturzversuch vom 20. Juli 1944, Berlin 2004. S.27-57.
Gedenkstätte Deutscher Widerstand: Themenkatalog 8, Wege zum 20. Juli 1944, Berlin 2014, S.3-15.
Manfred Messerschmidt: “Motiv der militärischen Verschwörer gegen Hitler”, Gerd R. Ueberschäer (Hrsg.): NS-Verbrechen und der militärische Widerstand gegen Hitler, Darmstadt 2000, S.107-118.
ペーター・ホフマン『ヒトラーとシュタウフェンベルク家－「ワルキューレ」に賭けた一族の肖像－』大山晶訳 (原書房, 2010年), 81 - 273 頁。
- (15) Gedenkstätte Deutscher Widerstand: Claus Schenk Graf von Stauffenberg und der Umsturzversuch vom 20. Juli 1944, Berlin 2004. S.58-79.
ペーター・ホフマン, 前掲書, 288 - 321 頁。
- (16) Gedenkstätte Deutscher Widerstand: Themenkatalog 9, Stauffenberg und das Attentat vom 20. Juli 1944, Berlin 2014, S.20-31.

- 小林正文『ヒトラー暗殺計画』(中央公論社, 1984年), 3-20頁。
 ペーター・ホフマン, 前掲書, 386-425頁。
 山下, 前掲書, 211-232頁。
- (17) Gedenkstätte Deutscher Widerstand: Claus Schenk Graf von Stauffenberg und der Umsturzversuch vom 20. Juli 1944, Berlin 2004, S.84-95.
 Gedenkstätte Deutscher Widerstand: Themenkatalog 10/11, Der Umsturzversuch vom 20. Juli 1944, Berlin 2014, S.8-65.
 小林, 前掲書, 124-142頁。
- (18) 小林, 前掲書, 143-150頁。
 對馬, 前掲書, 141-154頁。
- (19) ヘルムート・オルトナー『フライスラー-ヒトラーの裁判官-』(白水社, 2017年)。
 小林, 前掲書, 150-157頁。
 山下, 前掲書, 233-244頁。
- (20) 對島, 前掲書, 236-246頁。
 山下, 前掲書, 245-260頁。
- (21) Gedenkstätte Deutscher Widerstand: Ständige Ausstellung Widerstand gegen den Nationalsozialismus, Berlin 2015.
- (22) 高田敏, 初宿正典 編訳『ドイツ憲法集 (第2版)』(信山社, 1997年), 218頁。
- Gedenkstätte Deutscher Widerstand: Themenkatalog 10/11, Der Umsturzversuch vom 20. Juli 1944, Berlin 2014
- Gedenkstätte Deutscher Widerstand: Ständige Ausstellung Widerstand gegen den Nationalsozialismus, Berlin 2015
- Hamerow, S. Theodore: Die Attentäter. Der 20. Juli von der Kollaboraton zum Widerstand, München 1999
- Kershaw, Ian: Luck of the Devil. The Story of Operation Valkyrie, London 2009
- Kniebe, Toblis: Operation Walküre. Das Drama des 20. Juli, Berlin 2009
- Knopp, Guido: Sie wollten Hitler töten, München 2005
- Knopp, Guido: Stauffenberg. Die wahre Geschichte, München 2009
- Krockow, Christian Graf von: Eine Frage der Ehre. Stauffenberg und das Hitler-Attentat vom 20. Juli 1944, Hamburg 2004
- Medicus, Thomas: Melitta von Stauffenberg, Berlin 2012
- Moltke, Helmut James von: Im Land der Gottlosen. Tagebuch und Briefe aus der Haft 1944/45, München 2009
- Roon, Ger van: Widerstand im Dritten Reich, München 1994
- Stauffenberg, Berthold Shenk Graf von: Auf einmal ein Verräterkind, Baden 2011
- Steinbach, Peter u. Johannes Tuchel (Hrsg.): Widerstand in Deutschland 1933-1945, München 1994
- Steinbach, Peter u. Johannes Tuchel (Hrsg.): Lexikon des Widerstandes 1933-1945, München 1994
- Ueberschäer, Gerd R. (Hrsg.): NS-Verbrechen und der militärische Widerstand gegen Hitler, Darmstadt 2000
- Witzleben, Georg von: 《Wenn es gegen den Satan Hitler geht...》, Hamburg 2013
- オルトナー, ヘルムート『フライスラー-ヒトラーの裁判官-』(白水社, 2017年)
- 小林正文『ヒトラー暗殺計画』(中央公論社, 1984

参考文献

- Aretin, Uta von: Freiheit und Verantwortung. Henning von Tresckow im Widerstand. Baden 2011
- Brakelmann, Günter: Peter York von Wartenburg 1904-1944. Eine Biographie, München 2012
- Finker, Kurt: Der 20. Juli 1944. Militärputsch oder Revolution, Berlin 1994
- Gedenkstätte Deutscher Widerstand: Claus Schenk Graf von Stauffenberg und der Umsturzversuch vom 20. Juli 1944, Berlin 2004
- Gedenkstätte Deutscher Widerstand: Themenkatalog 8, Wege zum 20. Juli 1944, Berlin 2014
- Gedenkstätte Deutscher Widerstand: Themenkatalog 9, Stauffenberg und das Attentat vom 20. Juli 1944, Berlin 2014

年)

シュナイダー, M.C. / W. ズユース『白バラを生きる』浅見昇吾訳 (未知谷, 1995年)

ショル, イング『白バラは散らず』内垣啓一訳 (未来社, 1977年)

関楠生『「白バラ」－反ナチ抵抗運動の学生達』(清水書院, 1995年)

高田敏, 初宿正典 編訳『ドイツ憲法集 (第2版)』(信山社, 1997年)

竹中暉夫『エーデルヴァイス海賊団－ナチズム下の反抗少年グループ』(勁草書房, 1998年)

ダレヤー, スティ『ワルキューレ－ヒトラー暗殺の二日間－』加藤節子 他訳 (原書房, 2009年)

對馬達雄『ヒトラーに抵抗した人々－反ナチ市民の勇気とは何か－』(中央公論新社, 2015年)

中井晶夫『ヒトラー時代の抵抗運動－ナチズムとドイツ人－』(毎日新聞社, 1982年)

ロートフェルス, ハンス『第三帝国への抵抗』片岡啓二他訳 (弘文堂新社, 1970年)

ベルトルト, ヴィル『ヒトラー暗殺計画・42』(社会評論社, 2015年)

ホフマン, ペーター『ヒトラーとシュタウフェンベルク家－「ワルキューレ」に賭けた一族の肖像－』大山晶訳 (原書房, 2010年)

山下公子『ヒトラー暗殺計画と抵抗運動』(講談社, 1997年)

本論文は、平成28年度日本大学国際関係学部個人研究費及び平成29年度日本大学海外派遣研究者(短期B)の成果に依る。